J. Jpn. Soc. Soil Phys.
土壌の物理性
No. 125, p.55 ～ 57 (2013)

資　料
Miscellaneous

2013 年度土壌物理学会大会　エクスカーションの報告

長田友里恵 [1]（参加学生取りまとめ）

2013 年 10 月 26 日 ～ 27 日，福島市に於いて土壌物理学会大会が開催された．本報では，西日本から今回学会に参加した学生により，飯舘村の除染現場に訪れたエクスカーションの模様と感想を報告する．

エクスカーションの行程（27 日）

8:40　福島駅 出発
9:35　飯舘村へ入る
9:45　汚染土壌の仮 · 仮置き場　見学
10:15　飯舘村役場にて休憩
10:45　上比曽地区の森林　見学
12:30　昼食
14:00　ふくしま再生の会　作付試験圃場　見学

エクスカーション当日は，寒さが身に染みるものの，前日までの雨天が信じられないほど気持ちのよい天気となった．福島駅を出発し，飯舘村へと向かった．飯舘村は 2011 年 4 月 22 日に計画的避難区域に指定されて以来，現在もほとんどの地域で居住が制限されている．道中では溝口会長や，「ふくしま再生の会（横川 · 溝口，2013)」理事の菅野宗夫さんから，飯舘村の現状や菅野さん自身の心境などを聞かせていただいた．

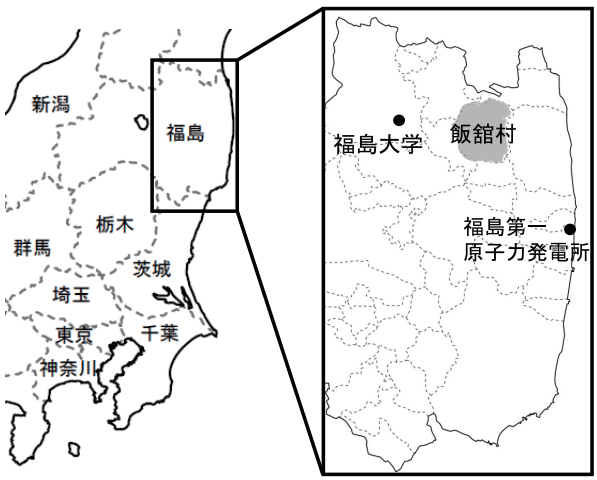


Fig. 1　飯舘村の位置図．

飯舘村へ入り，まず目に入ったのは，至るところに置かれている汚染土壌の詰められたフレコンバッグである．須萱地区にある汚染土壌の仮 · 仮置き場では，想像以上にたくさんのフレコンバッグが積み上げられ，今も行き場が決まっていない状態であった（Photo 1）．

次に，上比曽地区の森林を訪れ，林内雨 · 樹幹流 · 浸透水などの調査の様子を見学した．

昼食では，会場に「ふくしま再生の会」代表の田尾陽一さんが合流し，ふくしま再生の会の組織や活動についてお話しいただいた．ここで GPS と線量計を用いて作成された線量マップを見せていただいた（Photo 2）．データが整えられた見やすいマップであったが，GPS のずれを修正するのに大変時間を要した，とのことだった．

ふくしま再生の会の作付試験圃場に到着するとすぐに，「イネ試験栽培」の文字が見えた（Photo 3）．ここでは，サンプリング土壌や根の線量（Photo 4），大気中の塵を調査しているとのことだった．

飯舘村での滞在中，参加者のうちの 16 名が積算線量計を付けて見学した．その積算線量計の測定結果を図に示す．滞在最終時の積算線量の平均は 4 μSv であった．時間変化では 140 ～ 210 分で大きく変化しており，森林の線量が高かったのではないかと考えられる．

当日，詳しい説明を下さった菅野宗夫さん，田尾陽一さんをはじめとするふくしま再生の会の皆さま，酒井政秋さん，様々な議論を交わして下さった皆さまに，ここに感謝の意を記します．



Photo. 1　仮 · 仮置き場に積まれたフレコンバッグ．

[1] 三重大学大学院生物資源学研究科



Photo. 2 線量マップ.



Photo. 3 ふくしま再生の会 作付試験圃場.



Photo. 4 サンプリングした根（左）と土壌（右）.

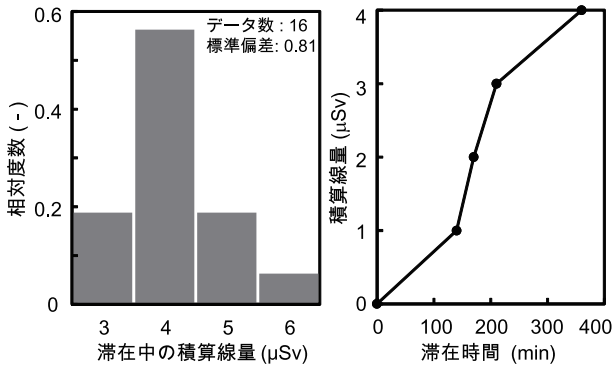


Fig. 2 滞在中の積算線量と線量の時間変化.

参加した学生の感想

今回のエクスカーションに参加するまで，自分が福島のためにできることはせいぜい募金すること程度だと考えていた．なぜなら，被害の規模と深刻さから，「自分ができることはない」と無力感を抱いていたからである．しかし，復興を目指す人々と交流し，お互いを知ることが支援の第一歩だと感じた．何が求められているのかを肌で感じることで，自分たちにできることが何なのか気付けるのだと思う．

佐賀大学 修士 1 年　上田哲大

飯館村でのエクスカーションでは，原発事故から 2 年経った今でもほとんど進んでいない除染の現状を知った．そのような中，復興に向けてさまざまな活動を行っているふくしま再生の会のみなさんの話を聞いていると，まず，私たちがやるべきことは実際に現地に足を運んで「真実」を見ることであろう．その上で，各々が何をできるか考え，行動し，次の世代に伝えていくことが大切なのではないかと思う．

佐賀大学 修士 1 年　上村将彰

今回，福島での土壌物理学会に参加したことで，多くの刺激を受けた．特に，飯館村でのエクスカーションでは，除染の現場やふくしま再生の会による試験区の現状を直接見ることができ，住民の方々の声や思いを聴くことができた．正しい見識や技術を持つ人たちが行動し，広めていくことの大切さを改めて認識した．

佐賀大学 学部 3 年　高木恭平

今回のエクスカーションでは，私の一日の積算放射線量は 4 μSv であった．目に見えず，どこにどの程度の量が存在しているのかわかりにくい放射線であるからこそ，ふくしま再生の会の方々が行っていたように，土壌の放射線量などを測定して数値化し，可視化することで，安全性を伝えていくことが復興を進める上で重要なことであると感じた．

佐賀大学 学部 3 年　平嶋雄太

今，日本に住むどれだけの人が，放射線の，現地の，除染の事実を知っているだろうか．私自身もこのエクスカーションが初めて被災地に滞在する機会となった．私たちが飯舘村で目にしたものは，至る所に設置された線量計，閑散とした街並み，除染が未だ 3 ～ 5 % しか終わっていない広大な農地である．菅野宗夫さんの「飯舘に訪れ，現状を知ってほしい」という言葉が日本中に，世界中に伝わり，もう一度日本中が被災地について考えるべきであると感じた．

三重大学 修士 1 年 長田友里恵

大量に積まれた黒色のフレコンバックを見た時，飯舘村が被災地という事を実感した．写真で見た事がある風景なのに，初めて見るような気持ちになった．震災以来，新聞やテレビで放射性物質の汚染について聞かない日は無かった．それが日常化し，いつしか自分の中で汚染問題が他人事の様になっていた．おそらく，多くの人が同じ気持ちだろう．そんな人には，福島に赴き，現地の汚

染現状を自分の目で確かめて欲しいと私は伝えたい．

三重大学 修士 1 年 竹内萌実

ふくしま再生の会の活動を見学して，私はその細やかな測定と膨大なデータ，そして効率的に測定を行うアイデアの多さに驚いた．同会には多様な専門分野から人が集まっており，各々の知識が活動に生かされていた．福島の復興に尽力している会の人たちの姿を見て，私は彼らの生きる力を強く感じた．そして，村の現状や会の活動を伝えることが，飯舘村を見学した者としての最低限の責任であると思った．

三重大学 修士 1 年 三木真隆

10/27 に飯館村へ見学に行った．汚染土の仮 · 仮置き場や水田でのサンプルを採取する所など見ることができた．ふくしま再生の会の方々による現場の生の声を聴くことができたのはとても貴重な体験だった．この見学会を通して，自分が学んでいる土壌物理学が福島県の復興に貢献しているということを実感することができた．勉学に励み，少しでも福島県の復興につながることをしたいと思った．

三重大学 学部 4 年 岡橋卓朗

飯舘村の田にはセイタカアワダチソウの黄が散見する．2 年以上も放棄していたのだから当然だ．表土剥ぎ取りによる除染は想像以上に進んでいなかった．菅野宗夫氏らの話を伺いそこに暮らす人の，再生の会に携わる人の想いに触れ，これまで被災地に対してぼんやりとイメージしていたものが一掃された感覚だった．百聞は一見に如かず．「もっと現地に寄り添った対応を」．宗夫氏のこの言葉は少なくとも 30 年は心に刻んでおかなければいけないと思った．

三重大学 学部 4 年 釘﨑佑樹

震災から 2 年半がたち，除染や復興ということからやや関心が薄れていたが，今回の学会やエクスカーションを通して，除染の最前線に立つ方々のお話や飯舘村の現場を直接見ることができ，貴重な経験をさせていただいた．また学会では，同年代の発表を聞く機会があり，これからの自分の研究の刺激になった．今後も土壌物理学を一生懸命勉強して，自分もこの学問を盛り上げていこうと感じた．

三重大学 学部 4 年 成毛千尋

引用文献

横川華枝 · 溝口勝（2013）：飯館村再生を目指す協働の成り立ち—ふくしま再生の会を事例に—. 土壌の物理性, 125: 53–54.